

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02064

研究課題名(和文) 認知症介護者における介護ストレスと介護に対する意味付け

研究課題名(英文) Caregiver burden and positive aspects of caregiving among family dementia caregivers

研究代表者

小山 明日香 (Koyama, Asuka)

熊本大学・大学院生命科学研究部(医)・助教

研究者番号：50710670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1) 認知症介護者における介護負担感のなかで、多くの介護者に共通する負担と個別的要素の強い負担を明らかにすること、2) 介護についての肯定的意味付けについての尺度である Positive Aspects of Caregiving (PAC) の日本語版を作成し標準化すること、を目的とした。研究結果より、1) 時間的制約という負担は個別性が高く、患者の将来への不安や頼られているという感覚は多くの介護者に共通してみられた。2) PAC日本語版の信頼性・妥当性はおおよそ確認できた。PACは介護者の希死念慮と有意な関連があったことから、介護に関する肯定的認知を高めるような支援が必要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、認知症介護者の心理的要因に関しては、負担やストレスなどの負の側面が着目されることがほとんどであった。しかしながら、近年、海外では認知症介護の肯定的側面の重要性が指摘されている。介護に対する肯定的な認知は、介護者の負担感を軽減し、介護者自身が介護を続けながらよりよく生きることを後押しするものである。本研究での成果を通じて、わが国においても介護に関する肯定的側面への注目が高まることを期待している。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to 1) clarify the common burden among almost all dementia caregivers and the personal burden which differ among caregivers, and 2) develop the Japanese version of the Positive aspects of Caregiving (PAC) and test the reliability and validity of it. We found that lack of time due to caregiving varies among caregivers, whereas fear for the future and feeling of being relied on by dementia patients were common burden for caregivers. We also verified the reliability and validity of the Japanese version of PAC. PAC was significantly related with caregivers' suicidal ideation. To encourage caregivers to find positive aspects of caregiving would be needed.

研究分野：老年心理学

キーワード：認知症 介護負担 介護の肯定的側面

1. 研究開始当初の背景

65歳以上の高齢者のうちの15%が認知症であると言われる昨今、家族の介護の問題は深刻である。超高齢化、核家族化等により介護者の負担は以前にも増している。O'Dwyerら(2016)の研究では介護者の16%が過去1年間に1回以上自殺を考えたという。希死念慮は自殺の最大のリスクファクターであり、また介護者のQOLの低下に強く影響するものであり、介護者の希死念慮の問題は看過できない。

介護ストレスには、認知症患者の行動・心理症状(BPSD)や日常生活動作(ADL)の低下が大きく影響する。環境調整や社会資源の利用、服薬などにより、介護者の負担はある程度改善する可能性があるが、それだけでは十分ではない。近年、海外では介護者の介護に対する肯定的な意味付け・認知の重要性が指摘されている。介護に対する肯定的な意味付けは、介護者の介護負担感を軽減し、介護者が介護を継続しながらよりよく生きるための後押しをするものであると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1)認知症介護者における介護負担感のなかで、多くの介護者が共通して感じる負担と、個別的要素の強い負担を明らかにすること、2-1)介護についての肯定的意味付けについての尺度であるPositive aspects of caregiving(PAC)の日本語版を作成し標準化すること、2-2)肯定的意味付けと関連する要因を明らかにすること、特に希死念慮との関連について検討すること、である。

3. 研究の方法

上記「研究の目的」のそれぞれについて、以下の方法で研究を行った。

1) 熊本大学病院神経精神科認知症専門外来を受診した認知症患者301名とその家族介護者を対象とした。一人の認知症患者について、その人の認知機能、ADL、認知症の行動・心理症状(BPSD)等から予測される介護者の介護負担感(J-ZBI)得点を重回帰分析の手法を用いて算出し、それよりもJ-ZBI得点が高い上位25%を高負担群、低い25%を低負担群、その中間を中負担群とした。3群間でJ-ZBI得点の下位項目得点を比較した。3群間で差の大きい項目は、負担の強さに個人差の大きい項目、3群間で差の小さい項目は、個人差の小さい項目と判断することとし、その根拠として効果量(d^2)を算出した。

2) PACの原著者より許可を得て、日本語版PACを作成した。本研究班の研究者およびバイリンガルの日本人が独立して翻訳を行い、それを統合して一つの版を作成した。次に、翻訳の経験に長けた翻訳者によるバックトランスレーションを行い、乖離がないか確認した。その後、少数数の対象者での予備調査を経て、日本語版を完成させた。作成した日本語版の信頼性妥当性を検討するため、熊本大学病院神経精神科認知症専門外来を受診した患者の家族介護者77名(平均年齢77.9歳、男性34名、女性43名)に対し、PAC日本語版および介護負担感尺度であるZarit Burden Interview日本語版(J-ZBI)を施行し、また、現在の介護状況、介護者の服薬状況、介護者の希死念慮等についてたずねた。患者の臨床的情報として、認知機能やADL、BPSDなども評価した。PAC原版では、9つの各項目について「まったくあてはまらない(1点)」から「とてもあてはまる(5点)」の5段階で評価し、45点満点で得点が高いほど肯定的意味付けが強いことを意味する。原版では「わからない」は-3点、「回答拒否」は-4点として合計得点を算出するが、本研究では原版通りの合計得点と、わからないおよび回答拒否を欠損として有効回答項目から換算した合計得点(有効回答項目の合計得点 $\times 9 \div$ 有効回答数)をそれぞれ算出した。

4. 研究成果

1) 介護負担感を強く感じている介護者は、特に時間的制約に関して強い負担を感じており(図1. 緑で囲った項目) 特に介護者が子である場合その傾向が顕著であった。一方で、患者から頼られているという負担感や患者の将来への不安は介護者におおよそ共通して高かった(図1. オレンジで囲った項目)。仕事や育児と介護の両立、複数の者の介護など、時間的な余裕のない状態で介護を行っている人に対する積極的な支援が望まれた。

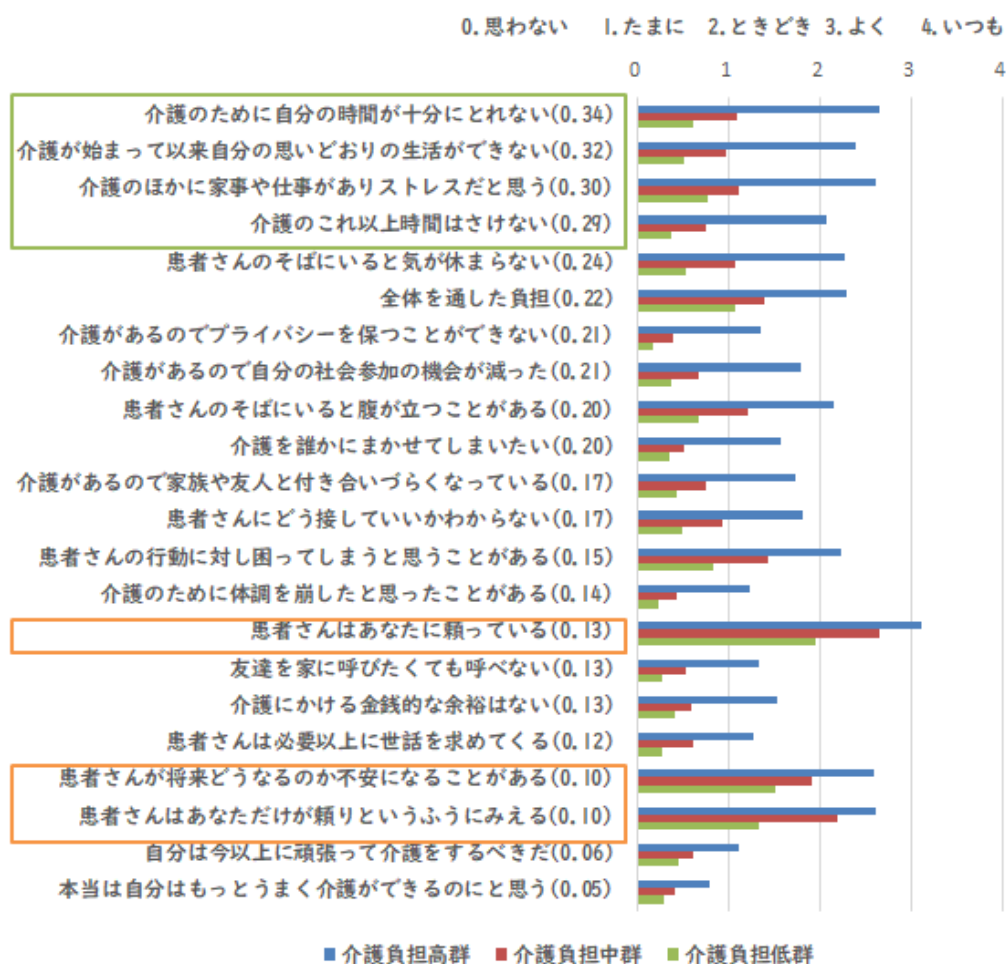
2) PACの平均得点は、原版通りの合計得点で30.4点、換算後の合計得点で33.8点であった。

クローンバックの係数は、原版通りの計算方法で算出した場合0.854、換算後に算出した場合0.862であった。因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、原版に従った算出方法では因子が抽出できなかったが、「わからない」「回答拒否」を欠損として欠損値をペアごと

に除外した場合、原版と同様の2因子が抽出できた(「自己肯定感」および「人生観」)。PAC得点は、患者の認知機能やADL、BPSDとは有意な関連がなく、かつ介護者の介護負担感とも有意な関連がなかったが、介護者の希死念慮とは有意な関連があった。すなわち、介護肯定感の低さと介護者の希死念慮が有意に関連していた。ただし、原版どおりの合計得点との関連は有意ではなく、有効回答から換算した合計得点との関連においてのみ有意であった。

以上のことから、わが国においてはPACは「わからない」「回答拒否」をそれぞれ-3点、-4点とする原版とは異なり「無回答」とし、合計得点算出時は有効回答の項目から換算して合計するほうが適切である可能性が示唆された。また、介護に対する肯定的意味付けは、患者の臨床症状や介護者の介護負担感とは関連の低いものであり、むしろ介護者の個別的要素が強い可能性が示唆された。介護者に対する肯定的意味付けの低さは介護者の希死念慮と関連していることから、介護者にとって介護に関する葛藤を整理し、介護に関する肯定的認知を高めることが必要であると考えられた。そのためには、介護に関する様々な感情に対する気づきを促すような支持的な心理療法的介入が有効であろう。

図1. 介護負担感の強い群・中間群・低い群でのJ-ZBI下位項目の比較



() 内の数字は効果量 η^2

図 2. Positive aspects of caregiving (PAC)日本語版

Positive Aspects of Caregiving (PAC)日本語版

記憶障害や健康上の問題を抱える家族の介護にはさまざまな困難が伴うものの、介護を通して得られる良いこともあるといわれています。介護者らが挙げた良いことを以下に記載します。これらのコメントにどの程度同感できるか回答をお願いします。

介護を通して...

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる	わからない	回答なし
1. 自分は役に立っていると感じた	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
2. 自分に肯定的な気持ちを持た	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
3. 自分が必要とされていると感じた	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
4. 周りが自分を評価してくれていると感じた	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
5. 自分は大事な存在だと感じた	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
6. 自分は強い存在だと感じ、自信が持てた	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
7. 人生をより大切に思えるようになった	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
8. 人生に対してより前向きな姿勢を持つようになった	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)
9. 他者との関係が強まった	1	2	3	4	5	(-3)	(-4)

原版では「わからない」「回答なし」をそれぞれ-3点、-4点として合計得点を算出するが、日本語版ではそれらを欠損としたうえで、有効回答から換算する（有効回答項目の合計得点×9÷有効回答数）ほうが望ましい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tabira Takayuki, Hotta Maki, Murata Miki, Yoshiura Kazuhiro, Han Gwanghee, Ishikawa Tomohisa, Koyama Asuka, Ogawa Noriyuki, Maruta Michio, Ikeda Yuriiko, Mori Takaaki, Yoshida Taku, Hashimoto Mamoru, Ikeda Manabu	4. 巻 -
2. 論文標題 Age-Related Changes in Instrumental and Basic Activities of Daily Living Impairment in Older Adults with Very Mild Alzheimer's Disease	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Dementia and Geriatric Cognitive Disorders Extra	6. 最初と最後の頁 27~37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1159/000506281	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hatada Yutaka, Hashimoto Mamoru, Shiraishi Shinya, Ishikawa Tomohisa, Fukuhara Ryuji, Yuki Seiji, Tanaka Hibiki, Miyagawa Yusuke, Kitajima Mika, Uetani Hiroyuki, Tsunoda Naoko, Koyama Asuka, Ikeda Manabu	4. 巻 71
2. 論文標題 Cerebral Microbleeds Are Associated with Cerebral Hypoperfusion in Patients with Alzheimer's Disease	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Alzheimer's Disease	6. 最初と最後の頁 273~280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3233/JAD-190272	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ochiai Sho, Sugawara Hiroko, Kajio Yusuke, Tanaka Hibiki, Ishikawa Tomohisa, Fukuhara Ryuji, Jono Tadashi, Hashimoto Mamoru	4. 巻 18
2. 論文標題 Delusional parasitosis in dementia with Lewy bodies: a case report	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Annals of General Psychiatry	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12991-019-0253-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koyama A, Hashimoto M, Fukuhara R, Ichimi N, Takasaki A, Matsushita M, Ishikawa T, Tanaka H, Miyagawa Y, Ikeda M.	4. 巻 8
2. 論文標題 Caregiver Burden in Semantic Dementia with Right- and Left-Sided Predominant Cerebral Atrophy and in Behavioral-Variant Frontotemporal Dementia.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Dement Geriatr Cogn Dis Extra.	6. 最初と最後の頁 128-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1159/000487851	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Matsushita M, Yatabe Y, Koyama A, Katsuya A, Ijichi D, Miyagawa Y, Ikezaki H, Furukawa N, Ikeda M, Hashimoto M.	4. 巻 13
2. 論文標題 Are saving appearance responses typical communication patterns in Alzheimer's disease?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PLoS One.	6. 最初と最後の頁 e0197468
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jenvman.2018.04.059	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小山 明日香, 橋本 衛, 福原 竜治, 石川 智久, 松下 正輝, 高崎 昭博, 勝屋 朗子, 福田 瑛, 井上 麻衣, 吉浦 和宏, 竹林 実
2. 発表標題 認知症スクリーニングのためのSerial-7課題の実施方法に関する研究
3. 学会等名 第34回日本老年精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐久田 静, 橋本 衛, 高崎 昭博, 小山 明日香, 福原 竜治, 石川 智久, 宮川 雄介, 日高 洋介, 兼田 桂一郎, 鈴木 真希, 堀田 牧, 欠田 恭輔, 末廣 聖, 池田 学, 竹林 実
2. 発表標題 意味性認知症と自閉症スペクトラムは似ているのか?PARS思春期・成人期得点を用いた検討
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松下 正輝, 矢田部 裕介, 小山 明日香, 池田 学, 橋本 衛
2. 発表標題 認知症に関する訴えを神経心理学的に分析する アルツハイマー病、レビー小体型認知症、軽度認知機能障害における取り繕い反応の比較
3. 学会等名 第38回日本認知症学会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高崎 昭博, 橋本 衛, 福原 竜治, 石川 智久, 小山 明日香, 宮川 雄介, 佐久田 静, 本堀 伸, 一美 奈緒子, 堀田 牧, 兼田 桂一郎, 品川 俊一郎, 池田 学, 竹林 実
2. 発表標題 意味性認知症患者の自動車運転中止をめぐる状況と対応に関する一考察
3. 学会等名 第38回日本認知症学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山明日香、橋本衛、松下正輝、福原竜治、石川智久、遊亀誠二、田中響、池田学、竹林実
2. 発表標題 認知症介護負担感の介護者全般に共通する要素と個別的要素の探索.
3. 学会等名 第38回日本社会精神医学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 衛 (Hashimoto Mamoru) (20452881)	大阪大学・医学系研究科・准教授 (14401)	
研究分担者	藤瀬 昇 (Fujise Noboru) (20305014)	熊本大学・保健センター・教授 (17401)	
研究分担者	松下 正輝 (Matsushita Masateru) (30615935)	甲南女子大学・人間科学部・講師 (34507)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池田 学 (Ikeda Manabu) (60284395)	大阪大学・医学系研究科・教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関